不愉快だった猪名川グループ　～しっかりしてや!!流域委員会に参加して～

尼崎市　木村俊二郎

2 月 28 日に実施された「しっかりしてや!!流域委員会」の猪名川グループに尼崎の住民として参加したのだが、あってはならない光景を目にした。

止々呂美の住民は「私たちの声を聞いてもらっていない」といい、流域委員会の委員は「聞いた」ということだった。「住民の意見は聞いた」といったのはこともあろうに地域の特性に詳しい委員だった。「地域の特性に詳しい委員」は本来地域住民の声を委員会の反映させる任務を持っていると理解していたが、この場では、地域の意見を封じ込める役割を果たしていた。こんなことがあっていいのだろうか。

改めて考えてみると今回の「しっかりしてや!!流域委員会」の猪名川グループは、初めからちょっと変だった。各グループ冒頭発言者は 1 人なのに猪名川グループは 4 人いる。しかもそのうち 2 人は大阪自然環境保全協会の事務局長と会員だ。他の 2 人は止々呂美の住民。このメンバーから考えられるのは、当初から流域委員への意見を求めるというのではなく、ダムをめぐる止々呂美の住民の意見を封じ込めようとしていたのではないのか。これまでの経過からみれば止々呂美の住民が意見を言えば､反論がでるのは当然のことだ。これが今回の集会の目的だったのか。そのような集会ではなかったのではないか。

次に、なぜ司会者は冒頭発言者 4 人に向かって、参加者に向かって司会をしないのか。背後にいた 2 人の地域の特性に詳しい委員の顔色を見ながら司会をしていたのはなぜなのか。発言者は一部の人に限定されていたし、冒頭発言者が出した「地域住民の意見の反映」については今回の集会の中では触れられずじまいだった。そこには明らかに地域の特性に詳しい委員同士での集会の進行に対してなんらかの意図があったことを感じさせる。今回の集会のなかで、背後に浮かび上がる隠された意図は何なのかと考えるのは勘ぐり過ぎであろうか。

同じような光景は猪名川部会の中でも何度も目撃した。本来、委員会で検討すべきことを、河川管理者との対立と言う形に終わらせたことがたびたび見受けられた。特に目を背けたくなったのは、阪神水道企業からの水需要の出し方の説明を受けたときだ。計算の根拠を説明した阪神水道企業の課長に対し、詰め寄っても何の意味もない。どこが間違っているのか、どんな計算方法をしたらいいのかを部会で討議し、意見を述べるのが流域委員の役割ではないのか。まして個人の風呂水のことなど問題外だ。

このようなことがあるかぎり、公私を投げ打って取りまとめに務められた委員各位の努力を無にすることに、また流域委員会の大きな成果に汚点を残すことになりはしないか。